

インタビュー

「明日を拓く」

第228回

今月のゲストは、6月の日遊協通常総会で副会長に就任したばかりの(株)三洋物産副社長、金沢全求氏。かつて日遊協企画教育委員会に在籍し、店長等のグレードアップのために遊技機メーカーとの交流セミナーが企画されたとき、2006～07年に計3回、名古屋市の本社工場で見学会を開くなど(パチスロ関係はサミー(株)川越工場)、これまでも日遊協活動を熱心に支援してきた。今、業界が直面している諸課題……ファンの減少、4円パチンコの不振、依存の問題などについて率直な意見を聞いてみた。

かなざわ・ぜんきゆう

1954年生まれ。愛知県出身。名城大学商学部卒。77年(株)三洋物産入社。2005年同社専務取締役、12年代表取締役副社長。10年5月から日工組副理事長。12年6月、日遊協副会長就任。

聞き手 = 「日遊協」編集部

ゲスト

日遊協副会長・日工組副理事長

金沢全求氏

あわてて 失敗してはいけな

エコパチは業界全体の歩調で

——日遊協副会長に就任されました。まずは、抱負からうかがいたいと思います。

金沢 日遊協には、日工組からは毎回、副会長を出させていたいただいておりませんが、今回も諸先輩の後を継いで、日遊協副会長に就任させて頂いたことになりました。

日遊協の最大の特徴は、業界横断組織であるということです。こうした日遊協の特色を生かして、全日遊連をはじめ、日電協、全商協、回胴遊商、その他、業界のすべての力を結集していただき、いまわれわれが直面している全業界的な課題である、ファンの減少、4円パチンコの稼働低下などの諸問題の解決に取り組んでいきたいと思っています。

日遊協の場をお借りしまして、全日遊連はじめ、業界の皆さんと本音で話し合い、業界が直面する諸問題にいい解決策を見つけていきたい。そのためには出来る限りのご協力をさせて頂きたいと思っております。

**4円パチンコは
やはり負担が
重くなってきた**

——いまお話に出た4円パチンコの稼働低下、業界全体で深刻な問題となっていますね。まずこの原因をどのようにお考えになっていますか。

金沢 遊技にかかる費用の問題、これがやはり大きいと思います。

以前でしたら、経済もいまよりはずっとよかった。パチンコで遊んだり、居酒屋で飲んだり、余暇に対する考え方にも、いまよりはるかに余裕がありました。ところが、ここへきて日本経済自体が大きな下降線をたどっています。そのため収入は伸びないのに、教育費はかかる、公共料金は値上がりする。こうなると、サラリーマンの小遣いも当然制約されてきます。ただ、そうはいっても、皆さんパチンコが嫌いになったわけではないんです。その証拠に、1円パチンコには大勢のファンが詰めかけ、高い稼働率を示しています。やはり4円パチンコの遊技費用の負担が重いということの証拠ではないでしょうか。

**楽しい遊技性に
ファンも慣れて
難しい機械代**

——ファンがパチンコから離れていったというのではなく、4円パチンコから1円パチンコに移行してしまったということですね。では、どうしたら、ファンはまた4円に戻ってきてくれるでしょうか。

金沢 このような情勢の中で、ホル様が4円の新台を購入され、機械代の回収をはかろうとする、あるいは諸経費を賄おうとする。こうしたときに、あまりに早く機械代を意識しすぎると、やはりそのしわ寄せをファンに押し付ける結果となり、ファン離れを引き起

してしまうのではないのでしょうか。

このようなことから、機械をもっと安く供給できないのかというご意見が出てくるのだらうと思います。私どもとしてもそうした声にこたえようと様々な努力を重ねてはいますが、今日までいろんな演出やギミックに慣れてきたファンは、もっと楽しい遊技性、もっと美しい、面白い演出を求めてきます。

こうした機械が低価格で出来ればそれにこしたことはありませんが、実際問題としてそれはなかなか難しいわけです。業界で、この程度のレベルの機械であればいいんだよ、ということであるなら、できないことはありませんが、すでにドラックスな機械に慣れて、それが当たり前のファンにとつては、そのような機械ではとうてい満足できるものではありません。

ただ、メーカーとしては、野放図に豪華な機械づくりを競いあっているわけではなく、モノづくりに携わる立場からは何とか安くてもいいものを供給したいと思っています。このことは、ぜひ、ご理解

いただきたいと思います。

リユース方式 工夫続けるが 限界も見える

——メーカーさんの努力はある程度理解しつつも、この情勢では、とにかく安くしてくれ、というのが、ホール側の声ではありますね。**金沢** そういう声も確かにあります。それに応えるため、いま、大抵のメーカーでは、遊技機のリユースを進めています。新台を購入する場合は、まず、メインのスペックの遊技機を購入していただき、たとえば半年後、遊パチスペックの台を購入する場合は、メインのスペックの台を引き取って部品をリユースに回し、その分格安な価格で提供するというような方式です。

ただ、これだと、同じシリーズの中だけしか利用できないので、あまりメリットがないという声もあり、違うシリーズのものでも、こうしたリユースができないか、考えています。

こうした方式も、ホール営業のメインとなるような、ドラックス版の遊技機では、なかなか難しい面があります。ゲームの多様化の中で、開発コストはますますかさんでいます。目に見えるところの役物などはむろん、目には見えない液晶の中の開発コストというのも、非常に大きくなっています。

4円も1円も 安心して遊べる 遊技機を追求

——今後の課題というものは、どの辺りにあると思いますか。

金沢 われわれの機械を買っていただけるのは、ホール様以外にはありません。そういう意味では、ホール様には元気な営業をしていたために、もっと安くてもいい機

械を提供していかなくてはならないと思っています。

ホール様が元気な営業をおこなえるということは、ファンが喜んでホールに足を運んでくれるようではなくてはなりません。そのためには、ファンの時間消費のための額が上がらないようにする必要もあります。ホールのランニングコストを下げるため、いろんな段階で、一段の努力が必要でしょう。そのためわれわれには、さらに克服しなければならぬ多くの問題があると考えています。

——そうしたことを踏まえて、遊技機の将来について、どうお考えですか。

金沢 ファンの方々は、どうしてもハイリスク・ハイリターンな機械を求める傾向にあります。今で言うなら、人気があるのはやっぱりマックス機といわれる機械です。ヘビーユーザーといわれるファンほどこうした傾向があります。

このような環境の中で、私たちとしては、4円も1円も区別なく、安心して遊べるゲーム性というのはどういふものなのか、それを追求していくのが、私たちの永遠の課題であると思っています。



2006年7月、店長等48人が三洋物産本社工場(名古屋市千種区)を「遊技機メーカーとの交流セミナー」で見学した

**エコパチ遊技機
不正に強いのが
大きなメリット**

——日工組では、未来型のパチンコとして「エコ

パチ」の研究を続けていますが。

金沢 日工組では、未来型、将来型のパチンコの在り方として、どのようなものがあるか、いろいろ研究しています。その中の1つとしてエコパチを考えているということ、ホール5団体に紹介させていたいただいたわけですが、エコパチの一番のメリットは、言うまでもなく不正に強い機械だということです。

そもそも玉が内部循環するだけです。最近増えている、他店の玉を不正使用するというような事を完全に遮断することができません。現在の機械でも、様々な不正対策がおこなわれていますが、エコパチはそうした心配からほぼ完全に開放されるという特徴があります。

——エコパチは、普及していくでしょうか。

金沢 遊技機はたしかに不正防止



だけで普及するものではありません。しかし、他の機械より射幸性の高い機械というのでは社会的に許されるものではありません。とはいっても、何らかのプラスチックの面白さ、特典がなくてはファンに受け入れてはもらえないでしょう。

日工組では、そのような課題について、ホール団体はむしろ、周辺機器の団体と一体になって、いま勉強をしているという状態です。

**まず必要なのは
機械代を今より
下げることです**

——年内には発表されるというような話もありますか。

金沢 世間にはそういう話もあるようですが、慌ててやって失敗し

てしまったら、ホールにも大変な迷惑をかけることになります。ひとつひとつテストしながら、行政や他の業界団体とも相談し、慎重にやっつけていこうと思っています。

——エコパチが普及し、業界の主流となるようになったら、これは業界にとって大変革になりますね。

金沢 業界の主流になるかどうかはわかりません。普及するにしても、ランニングコストがいまより下がるという方向でなくては、難しいのではないのでしょうか。

そのためには、共通の枠、共通の部品の採用など、いろいろな課題があります。遊技機を作っているのは、何も日工組だけではありませんし、そうした他メーカーの団体とも話し合っていかなければなりません。現在は、日工組の技術者が各団体を回って、基本構想について、説明をさせてもらっている段階です。

**「のめり込み」は
その危惧について
適正にアピール**

——他に、日工組としては、いま

何が重要課題だと考えていますか。
金沢 いわゆる「のめり込み」、つまり「依存」の問題ですね。のめり込みというと、非常に反社会的な悪いイメージですが、私たちの以前の感覚からすると、「ファンの人気のある機械」と理解しがちでした。人気があるということ、のめり込みということは、本来違うことなんです。ただ、私たちはこれまであまり意識して区別してこなかった、という反省はしなくてはならないと思います。

1つのパチンコ台の前で延々長時間遊技される人がいます。それだけでのめり込んでいるとは直ちに言えませんが、クルマだって2時間運転したら少し休憩されたほうがいい。パチンコだって、目が疲れる、音も相当です。2時間くらい遊んだら、少し休憩して頂くのは、決して悪いことではありません。そういう文言を、ポスターで示したり、液晶の中で呼びかけるといふようなことも必要なのではないかということ、いま検討しています。

これも、程度問題で、お客様がうんざりするようになってはいけませんしね。なかなか難しいところ

インタビュー「明日を拓く」

あわてて失敗してはいけない エコパチは業界全体の歩調で

るです。いろいろ難しいところはあるかもしれませんが、現実には社会的にのめり込みはいけないことだといわれています。ただ、このままほうっておいて社会的非難を受けようであってはならないわけですから、その危惧はあるということとを適正にアピールするということとは必要なのではないかと思います。

人気が続く「海」
これだけ長いと
変化が難しい

——ところで、三洋物産といえば「海」シリーズですね。これだけ長く続くと、いろいろご苦労も多いのでは。

金沢 海シリーズは、もう12年になります。これだけやっていますと、話はどうしてもマンネリ化しますね。そこで少し改革しようとする、ファンからは「これは海シリーズではないじゃないか」というお叱りを受けるんです。そこが難しいところですよ。わが社としては、変わってなさそうに変わっている、〝心憎い演出〟とい

うのを開発の目標に心がけています。三洋物産では、他にも版權モノ、アニメなど、いろいろ手がけているんですが…。

——版權モノと自社製コンテンツとどちらが作りやすいですか。

金沢 それは版權モノです。作る側からすれば、自社製のコンテンツの場合、一からそれを考えなくてはなりませんからね。大変です。三洋物産では、版權モノ、自社製モノ、だいたい半分半分の割合で作っています。ただ、最近は、版權も大型のものは出尽くしています。他方で、ファンはメジャーブランドを求めますから、版權も高騰する一方です。こうした中で、遊技機を安く作るというのは大変難しい状況になっていますね。

業界で最も早く
新鋭の工場を
作って成功

——金沢さんは、どのようなきっかけから、この業界に入られたんですか。

金沢 遊技機の製造と

いうのは、家業みたいなものでしたから、大学を出るとすぐに中古機の会社に入り、アレンジボールの機械整備の会社にも2年くらいいました。その後、今の会社に入り、以来36年です。いずれにしても、社会に出たら、家の仕事を手伝う、という感覚でいましたから、抵抗はありませんでした。でも、当時は、ホントの町工場みたいだったんですよ。

——会社は、今では海シリーズで押しも押されぬ業界大手に成長しました。工場も早くから立派なものを作っていらっしゃいますね。

金沢 こんな町工場みたいなところでは、いい機械なんてできるわけがない。モノを作るには、ちゃんとした環境を整えなくては、と

いうので、業界で最も早く新鋭の工場を作りました。フル生産の状態でも、静かで、落ち着いた雰囲気というのが自慢なんです。

——日遊協の研修でも何度か工場見学をさせていただきましたね。

金沢 工場見学にはいろいろな方がみえます。地元の小学生も学校単位でモノづくりの過程を学ぶということ、見学に来ます。

——金沢さんの会社経営のモットーは何ですか。

金沢 モノづくりはやはり買う方の立場でモノを考え、作る、ということ。それから、笑顔ですね。これは社員にいつも言っていることです。が、どんな人にも、しかめっ面より笑顔の対応したほうがいい。嫌われるよりやっぱり好かれるほうが気持ちいい。この当たり前のことを、毎日、実践しようということなんです。

——趣味は何ですか。

金沢 ゴルフですね。だいたい、月に3回くらいのペースで行っています。腕のほうは、まだ、ときたま80台が出るというところでしょうか。

——本日は、お忙しいところ、ありがとうございました。



「海」苦労についても、にこやかに話す